

令和3年度 共に学び、生きる 共生社会コンファレンス in 北海道

日時：令和4年2月5日（土）10:00-16:00

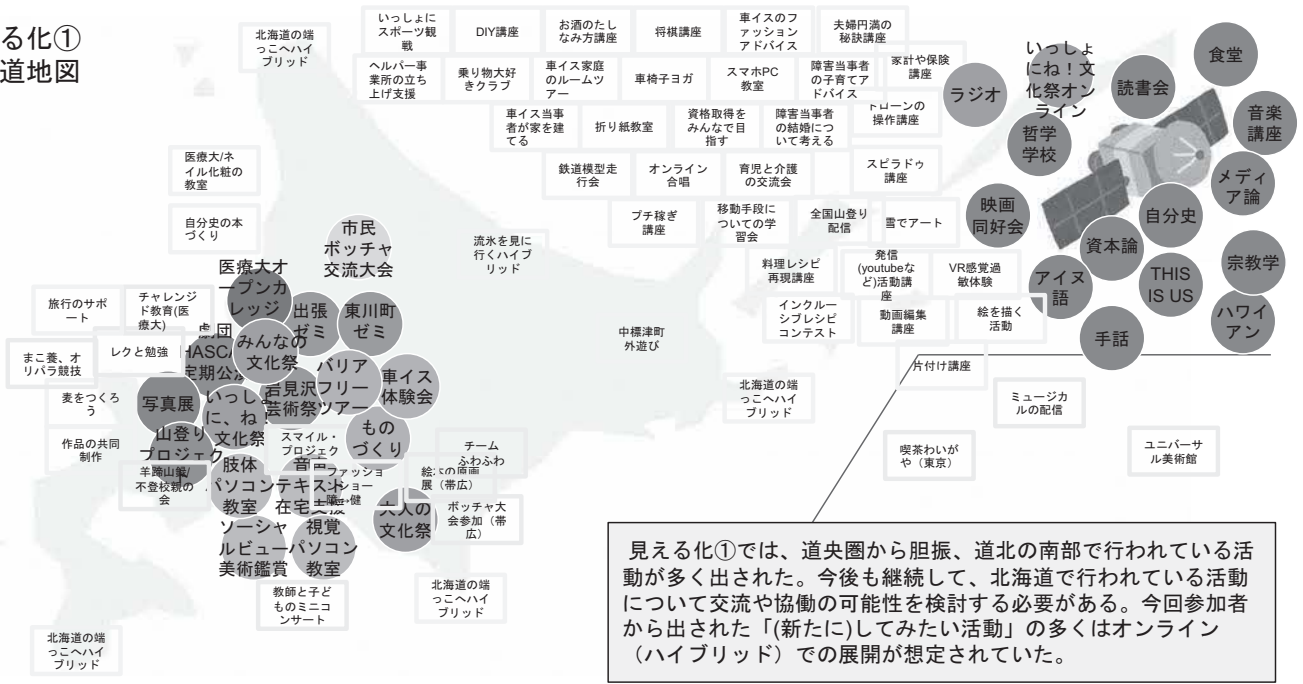
開催形式：Zoom ミーティング

事務局：北海道教育委員会/医療法人稲生会

第1部 全体会

- 今年度コンファレンスの全体テーマである「**障害のあるひと
ないひと みんなでひろげよう 北海道の社会教育**」について、前半では11団体から実践報告を聞いた。後半では、8人前後のグループに分かれて、現在行っている実践や、これからのアイデアを出し合い、Google formsを用いて収集、それを4種類の「見える化マップ」に落とし込んでいった。
- 報告団体（報告順）：北海道医療大学オープンカレッジセミナー、チャレンジキャンパスさっぽろ、苫小牧市障がい者パソコンボランティア友の会、社会福祉法人名寄市社会福祉協議会、カムイ大雪バリアフリーツアーズセンター、たすくゼミナール、みらいつくり大学校岩見沢アール・ブリュット芸術祭、いっしょにね！文化祭、北星女子高校医療的ケア児写真展、Dosanko Dreamix

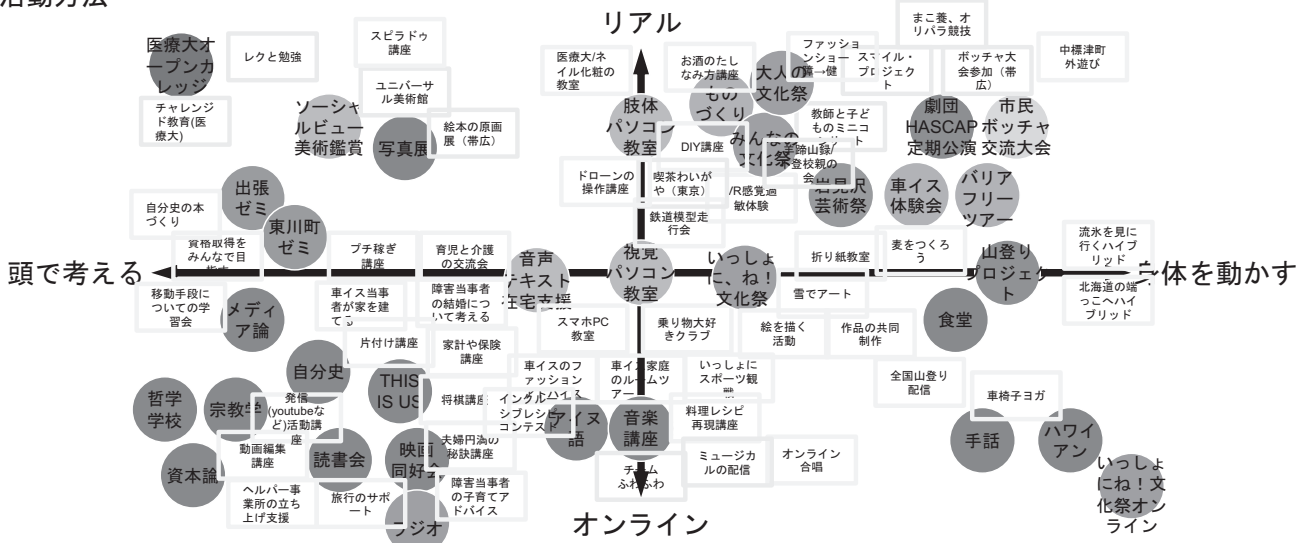
見える化① 北海道地図



- 発表団体
- 医療大オープンカレッジ
 - チャレンジキッズ
 - 小牧キッズ
 - 名寄市民パソコン会
 - 市民ポッチャ
 - カムイ大雪
 - たすくぜみ
 - みら大
 - 岩見沢芸術祭
 - いっしょにね!
 - 写真展
 - Dosannko Dreamix

見える化② x:活動内容 y:活動方法

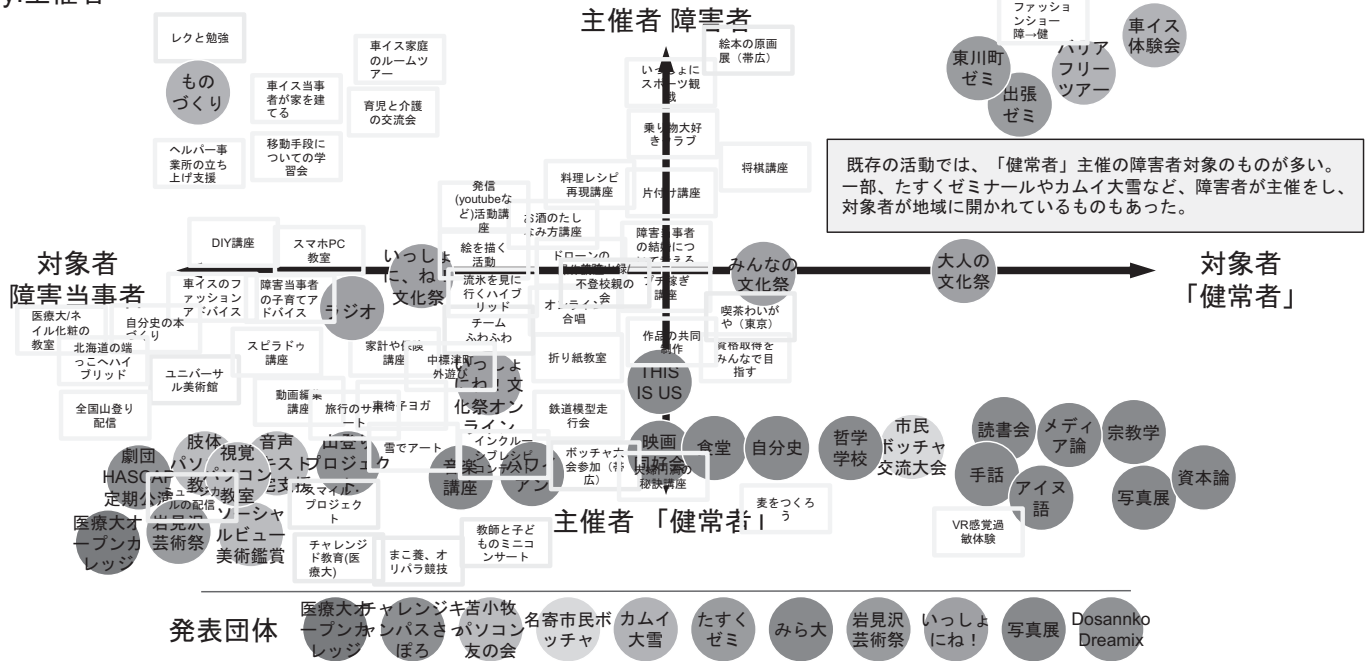
既存の活動では、リアルには体を動かすものが多く、オンラインでは頭で考える活動が多かった。実施の見通しをもつことの難しさがあったのか、「(新たに)してみたい活動」はリアルを想定したアイデアは少なく、オンラインで展開するアイデアが多かった。これまで少なかった第四象限の(オンラインで体を動かす)活動への希望も垣間見えた。



- 発表団体
- 医療大オープンカレッジ
 - チャレンジキッズ
 - 小牧キッズ
 - 名寄市民パソコン会
 - 市民ポッチャ
 - カムイ大雪
 - たすくぜみ
 - みら大
 - 岩見沢芸術祭
 - いっしょにね!
 - 写真展
 - Dosannko Dreamix

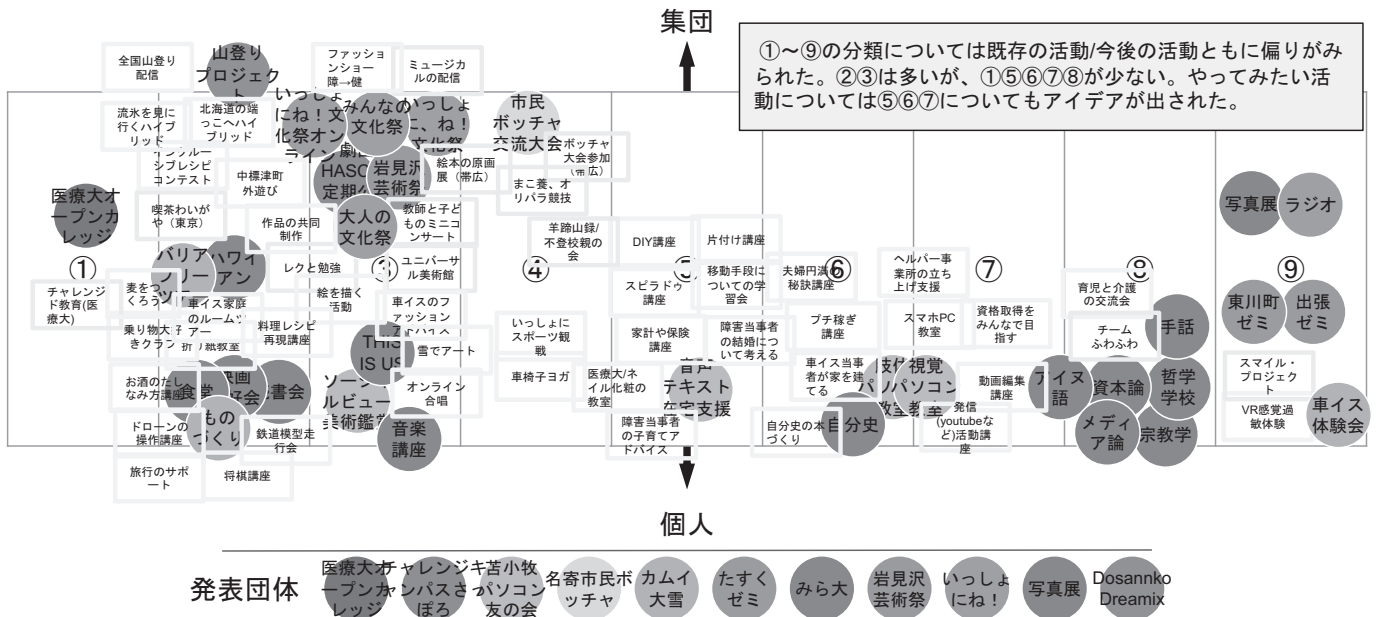
見える化③
x:対象者
y:主催者

やってみよう活動については、既存の活動よりも、おおよそ上部に配置されることが多く、障害者が主催をしていく活動への期待があることがわかる。見える化の担当者からは「対象者」の定義が難しく、例えば演劇における役者を指すのかそれとも観劇者を指すのか迷うといった葛藤もあったと報告があった。



見える化④
x:活動単位
y:文科省調査分類

- ① 学校段階で学んだ内容の維持・再学習
- ② 余暇・レクリエーション
- ③ 文化芸術活動
- ④ 健康の維持増進、スポーツ活動
- ⑤ 個人の生活に必要な知識・スキルに関する学習
- ⑥ 社会生活に必要な知識・スキルに関する学習
- ⑦ 仕事のスキルアップや資格・免許など、職業生活に関わる学習
- ⑧ 一緒に刺激あって向上していける仲間づくり、学習意欲を高めてくれる人間関係等に関する学習
- ⑨ その他



※第2部 第1分科会 「自治体がつくる学びの場 ～誰もが参加できる学びの場づくり～」

1 事例発表

障がい者の学びの充実や、誰もが参加できる学習機会の 充実に向けた取組

(1) 北海道教育委員会

令和3～4年「障がい者の障がい学習推進研究協議会」

道内の全市町村において市町村の障がい学習支援担当職員を対象

障がい者の障がい学習推進に関する基本的な研修を実施、学び場づくりの担い手を育成

(2) 空知教育局

滝川市立図書館長講演：誰もが読書ができる環境を整えるために

★障がいのある方にとって学びやすい場とは、誰もが学びやすい場である

(3) 北広島市

市町村における地域コンソーシアムモデルの推進

ビッグフラッグアート制作事業（北広島市×よしもと）

★「みんなの居場所づくり」には、当事者もどんな居場所が必要か考え、発言する

(4) むかわ町

「障がい者の障がい学習推進研究協議会」で町保健福祉課⇄町教育委員会が情報共有

★既存の事業等を活用した連携可能な取組の検討

（指導者が障がい者支援施設等へ訪問するなどして利用者負担軽減を図るなど）

★福祉との連携（他世代との交流）→放課後こども教室

(5) 知内町

「町民皆スポーツ条例」を制定

障がい者と運動やスポーツを通じた様々な交流を促進

★運動やスポーツを通じた交流により、障がい者と健常者が違和感なく交流できる

★回数を重ねることで健常者に障がい者を受け入れる心の体制が整い、

また、障がい者にも遠慮なく参加するという変容が見られた

(6) 岩見沢市

いわみざわアートアカデミー

学校卒業後の障がい者⇄北海道教育大学の教員や学生と関わり

芸術を教わる側から、教える側になることで、自分らしく暮らせる社会実現を目指す

2 協議

「障害者が参加できる学びの場」づくりの現状と課題、今後の方向性

(1) 子ども達が小さな時から一緒に学ぶ空間づくり (インクルーシブ教育)を進める必要について

お互いの成長を感じあえるように、共に学びあう空間づくりは大切（保護者）

学校にも限界があるため、地域ボランティア等で共に学び合う体験は大切（養護学校教諭）

当事者が小学校のクラスに入って学ぶ取組も進めている（名寄・元社会福祉協議会）

リーダー研修の参加者等も個別サポートして修了することができている（名寄・生涯学習課）

安全面や生活指導面で配慮すべきことを保護者とよく共有する必要がある（知内）

当事者を支援する「べからず集」を作成し、支援方法を学んでいる。（苫小牧・パソコン教室）

(2) 教育委員会と福祉部局の連携について

講師を頼まれることもあるが、担当者が研修を通して学び合うという段階にある（知内）

コンソーシアムの構成員に組み込んで連携して事業を展開している（北広島）

障がい者団体とつながるために社会福祉協議会と連携している（苫小牧・パソコン教室）

(3) どこから取組をはじめ、誰が始める？ (はじめの一步)

既存の事業から、福祉と連携してできることを模索していきたい（むかわ）

市と大学で連携協定を結んでいることから、大学を巻き込むことができた（北広島）

苦情をもとに、それを解決することから取組がはじまることもある（北広島）

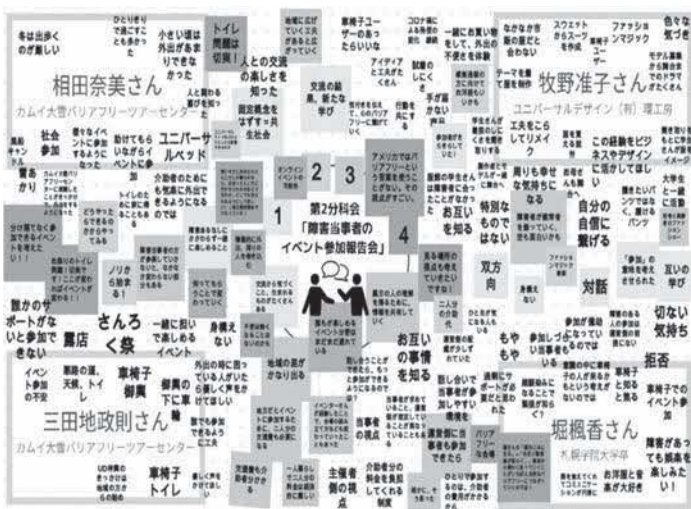
第二分科会



■一年目～障害の有無によらず楽しく参加できるイベントを企画する中で生まれる「コミュニティ」について考える

■二年目～一年目に企画したイベントをコロナ後に開催するため「障害」と「楽しさ」を深く考える

■三年目～障害当事者によるイベントの参加報告



参加者のコメント (一例)

- ・アメリカではバリアフリーという言葉が無い。視点が凄いなと思った。
- ・固定概念を外す=共生社会。
- ・お祭りのトイレ問題。切実でここが変わればイベントが変わる。
- ・交流の結果、新たな学びを得た。

当日は…

- ・当日の内容を付箋による色分けで見える化した。透明の付箋は報告者の発言、色付きの付箋は参加者の発言、オレンジの付箋はコメントーターの発言。
- ・各グループワークにより報告内容の気付き、感想を共有。
- ・当事者の発言を重視し、発表に想定以上の時間を要したためグループワークの時間を縮小。
- ・質問やチャットのコメントが活発だった。

報告者のコメント (一例)

- ・学生は障害当事者と外出し、始めて障害者の外出の不便さを体験した。
- ・気付きを伝えて心のバリアフリーに繋がっていく。
- ・小さい頃は一人で過ごすことが多かった。就職しイベントに参加して人と関わる喜びを知った。
- ・外出の時に困っている人がいたら優しく声をかけてほしい。
- ・イベントの主催者側に障害者が来るという意識がない。障害者も娯楽を楽しみたい。

第1回
2019年度
もやわくカードゲーム

第2回
2020年度
もやわくカードゲーム
@オンライン

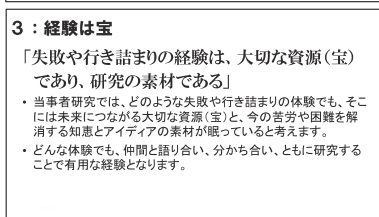
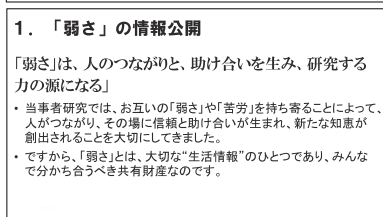
仮説
私たちは「もやもや
(苦労)」を基盤にして
こそ、「ともに学ぶ」
ことができる。

第3回
2021年度
働き方の当事者研究



開催概要

- ①開催趣旨説明
- ②自己紹介
- ③「当事者研究の15の理念」の確認
- ④「働くことの当事者研究」の実践
- ⑤感想の分かち合い



当日は、「ラジオ参加」をする人がいたり、「カメラをオンにするのは苦手だから」とチャットで参加する人がいたり、手話で参加する人がいました。

1.研究テーマの決定

「(職場で)みんなとうまくやりたい。でも…。」
→かっこつけてない?
→「かっこつけ」の当事者研究

2.研究経過

- ①一人の「かっこつけ」と、組織の「かっこつけ」がある。
- ②「かっこつけ」ていい時もあれば悪い時もある。
- ③「かっこつけ」は時に困難にもなるが、時に成長のエネルギーにもなる。
- ④「かっこつけ」も「弱さ」も、渡す人の問題でもあり、受け取る人の問題でもある。
→「かっこつけ」て、失敗しても、「かっこよく」ある研究が必要?

一回の「イベント」で「もやもや」を基盤にした「探究」は難しい。

月に一度程度で活動を継続

第4分科会 生涯にわたる学びのケイカクを考える

- シンポジウム形式（ブレイクアウトセッションなし）
- 特別支援教育、福祉、高等教育などにおける「学びの計画」の現状や課題についての報告を聞き、障害の有無によらない「生涯にわたる学び」を支えるためのケイカクのあり方について考える
- 報告者（報告順）：北海道教育委員会特別支援教育課、あいの里高等支援学校（知的障害）、北見北斗高校（普通高校）、藤女子大学、相談室あんど、みらいつくり大学校
- 指定発言：身体障害・医療的ケア当事者（元特別支援学校高等部、現在は通信制大学に在籍、みらいつくり大学校で学習およびライターとして活動）

第4分科会 障害の有無によらない生涯にわたる学びのケイカクのあり方のポイント

- 主体はあくまで学習者
- 本人の強みを伸ばしたり、新しい価値を発見することを重視
- 本人の学びや支援についての記録を蓄積できるとよい
- 必ずしも明確な目標を立てる必要はなく、「計画外の出来事」も重要
- コーディネーターや共同学習者の存在が、学びの幅や深さ、継続性につながる可能性
- 随時修正できたり、一緒に学ぶ仲間がコメントできるケイカクがあってもよいのでは
- 重症心身障害者など言葉を用いることに困難さがある人の「ニーズ」をどのように考えるかは課題

第5分科会

「学生が考える共生社会」に向けたアクション宣言

開催趣旨：現役大学生が企画準備当日の運営全てを担う「学生サミット」。2ヶ月間の準備を経て辿り着いた「共生社会」の実現に向けた学生のアクション宣言をコンファレンス当日に発表。学生が発した宣言の意義について多様な参加者とともにディスカッションすることで、その理解を深めた。

学生サミット 学びの軌跡

- 10/29 第1回打ち合わせ
- 11/12 学生同士の顔合わせ①
- 11/30 学生同士の顔合わせ②
- 12/5 イブ参加①(初対面交流会)
- 12/14 お話し会①(医療法人稲生会理事長・土島先生)
- 12/17 お話し会②(衆議院議員・荒井ゆたか氏)
- 12/20 お話し会③(住み残りの友達国際交流)
- 12/26 イブ参加②(アライヴ体験)
- 12/26 打ち合わせ-MTG
- 1/4 イブ参加③(とんとこクッキング@医療法人稲生会)
- 1/9 イブ参加④(重度障害当事者の方のお宅訪問・餅つき)
- 1/13 お話し会④(LGBTQ当事者の方のお話し会)
- 1/16 お話し会⑤(とんとこクッキングの振り返り)
- 1/29 イブ参加⑤(写真展)

当日の概要

- 参加者 45名
内訳：発表学生7名、一般学生5名、当事者8名、当事者家族2名、社会教育関係7名、教諭4名、その他9名
- タイムスケジュール
 - 趣旨説明 (10分)
 - 学生チーム「アクション宣言」発表 (30分)
 - グループワーク (45分)
各グループ、学生による進行 (全5グループ、各8~9名)
学生から提示されたディスカッションテーマに基づく進行
 - アクション先行 or 理論先行 どちらが良い？
 - 学生から学ぶこと、大人から得られる学びって？
 - 学生による共有報告 (25分)
 - まとめ (10分)

第5分科会

「学生が考える共生社会」に向けたアクション宣言

アクション宣言

共生社会とは何か

直接的な答えは出なかった
自分たちは考え続けるスタート地点
に立ったに過ぎない

学生によるアクション宣言として
学び、考え、ふれ続けたい
「継続こそが肝心」

いつの間にか学べる場をつくりたい
「医療法人稲生会の一室から始める」

参加者とのグループディスカッションから～

- Z世代だからこそリアルに「触れる」ことの重要性を意識しているところに感銘を受けた
- アクション先行型でどんどん進めてほしい。互いに学びあうことを大事にして欲しい
- 経験豊富な大人から失敗談を聞くとためになる。いかに失敗談を引き出すかがポイント
- 大人のアンラーン(学び直し)も重要。空っぽの器として、学生とともに一緒に学んでいきたい
- 子どもから見てカッコよく見えたり頑張っている大人とたくさん出逢える機会があったら良い(学生)
- 異なる文化や立場の方のことを理解して認めあうことを小さい頃から経験する場が必要であると感じる(学生)
- 稲生会のみならず様々な人たちとの設定をもち続け、広げてほしい
- 医療的ケア児や肢体不自由の障害者のみならず多様な方々の話を聞いていきたい(学生)

第3部 分科会報告とまとめ

- 第1～5分科会の「見える化」を全員で共有
- 参加者からの意見（一部）
 - 身体障害の当事者：学「やりたい」という意欲生の分科会に参加。理論と行動どちらが先であっても、を応援したい
 - 聴覚障害の当事者（手話⇒手話通訳者が音声言語に通訳）：障害のあるひと ないひとが当たり前のように一緒に学べるインクルーシブ教育が必要
 - 知的障害の当事者：中重度の知的障害者には内容が難しいのでは
 - オンラインでも、ローカルな要素を重視した学びの場があるとよい
- 第5分科会の「アクション宣言」より、「思いがけず学びにつながる場（学ばさる場）」の必要性が認識された